南葵音楽文庫ミニレクチャー

ケクランのソナチネ

～スナール室内楽シリーズから（5）

近藤秀樹

2018 年 8 月 11 日（土）11：00

はじめに:　スナール室内楽シリーズ

・南葵音楽文庫所蔵の”スナール室内楽シリーズ”から
　興味深い作品を紹介
・今回のテーマ: 知られざる巨匠ケクランのピアノ曲

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

▲ シャルル・ケクラン

1. 知られざる巨匠　シャルル・ケクラン(ケックラン)

(Charles Koechlin 1867-1950)

・アルザス出身。1887 年、エコール・ポリテクニクに入学するも、健康上の理由で退学。音楽家を志す。

・1890 年、パリ音楽院に入学。作曲をマスネ、フォーレに学び、やがて同校でフォーレの助手をつとめる。

・1909 年、同門のラヴェルらと「独立音楽協会」を立ち上げ、新しい音楽を擁護。

・教育者としても優れる。弟子にプーランク、ミヨー。

・音楽評論家としても活躍。『ルヴュ・ミュジカル』等で健筆をふるう。

・理論書(和声法、対位法、管弦楽法についての著作)は翻訳され幅広く読まれた。
南葵音楽文庫にも以下の２冊が入っている。

『和声の変遷』清水 脩訳、音楽之友社、1962 年。
『対位法』清水 脩訳、音楽之友社、1968 年。

・アマチュアの写真家でもあり、
1933 年には共著で写真集『港』(*Ports*)を刊行している。[右の写真]

・モットーは自主独立と自由。
独立独歩(流行を追わず、伝統に縛られない)。
これが災いして一時は忘却されたが、20 世紀終わり頃から再評価が進む。

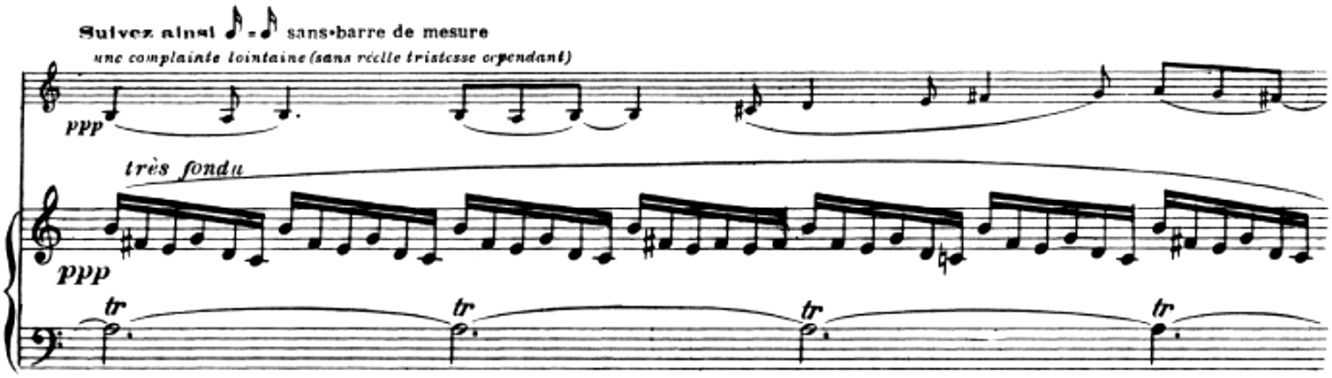
2. ケクランとスナール室内楽シリーズ

・第一次世界大戦で経済的に困窮。
　著述と教育に活路を見出す。
　作曲家としての円熟期に入ったと自覚。室内楽曲に精力的に取り組む。
　　Ex. フルート・ソナタ、オーボエ・ソナタ、ヴィオラ・ソナタ、チェロ・ソナタ、弦楽四重奏曲 etc.

フォーレと弟子たち。ピアノ連弾をしている二人のうち、手前に坐っているのがフォーレ(Gabriel Fauré 1845-1924)。矢印がケクラン。フォーレのすぐ上に顔が写っているのがラヴェル。なお、ケクランは、1927 年に師フォーレの評伝を書いている。

・デュラン社とスナール社
　ケクランは音楽出版社デュランに手紙で窮状を訴え、自作の出版を要望。
　ヴァイオリン・ソナタを聴いたデュランは「理解不能」「売れそうにない」と出版を拒否。
　ソナタはスナール室内楽シリーズの一環として出版。曲は師フォーレに献呈。

・ケクランのヴァイオリン・ソナタ　作品 64 (1915-16)
　一次大戦中に作曲。同時期に書かれたヴィオラ・ソナタ（作品 53）と対を成す作品。
　緩-急-緩-急の四楽章構成。J.S.バッハのヴァイオリン・ソナタがモデル。(cf. 教会ソナタ)
　森(第 2 楽章)、夜の湖(第 3 楽章)など、自然をイメージ。幻想的。



▲ ケクラン《ヴァイオリン・ソナタ》第 2 楽章より

・スナール社のケクラン

1920 年代のケクランの作品(ピアノ曲、室内楽曲)は、その大半がスナール社から刊行。
1924 年・第一期の「付録論考」Supplément littéraire et critique では、音楽評論家コレ（Henri Collet 1885-1951）がケクランを「シリーズの予約購読者の間で、もっとも人気のある作曲家」と評した。
また、同「付録論考」には、音楽評論家カルヴォコレッシ（Michel Dimitri Calvocoressi 1877-1944）のケクラン論が掲載された。

スナール室内楽シリーズに含まれるケクランの作品

ピアノ編

《12 の小品》 (1921 年・第一期)、
《エスキス》 (1921 年・第二期)、
《パストラル》 (1923 年・第二期)
《新しいソナチネ 》(1926 年・第一期)

ヴァイオリン編

《ヴァイオリン・ソナタ》 (1922 年・第一期)

チェロ編

《チェロ・ソナタ》 (1923 年・第一期)

アンサンブル編

《弦楽四重奏曲》第 1 番 (1921 年・第一期)
《弦楽四重奏曲》第 3 番 (1924 年・第一期)

＊ 第２番は今日なお未出版。

▲ カルヴォコレッシのケクラン論

3. ケクランのソナチネ

・ケクランのソナチネ

ピアノ独奏のための《5 つのソナチネ》作品 59 (1915-16 年)
ピアノ連弾のための《4 つのフランス風ソナチネ》作品 60 (1919 年)
ピアノ独奏のための《4 つの新しいソナチネ》作品 87 (1923-24 年)*

＊ スナールから出版。

ピアノ以外にも、無伴奏フルートのための《3 つの旋法的ソナチネ》作品 184 (1942/43) や、オーボエ・ダモーレと室内管弦楽のための《2 つのソナチネ》作品 194 (1942-43) がある。

簡潔率直。主題はしばしば民謡風。無味乾燥でない、教育的作品。

Cf. ケクラン〈ピアノのおけいこ〉(《古い田舎の家》作品 124, 1932-33, 第 4 曲)

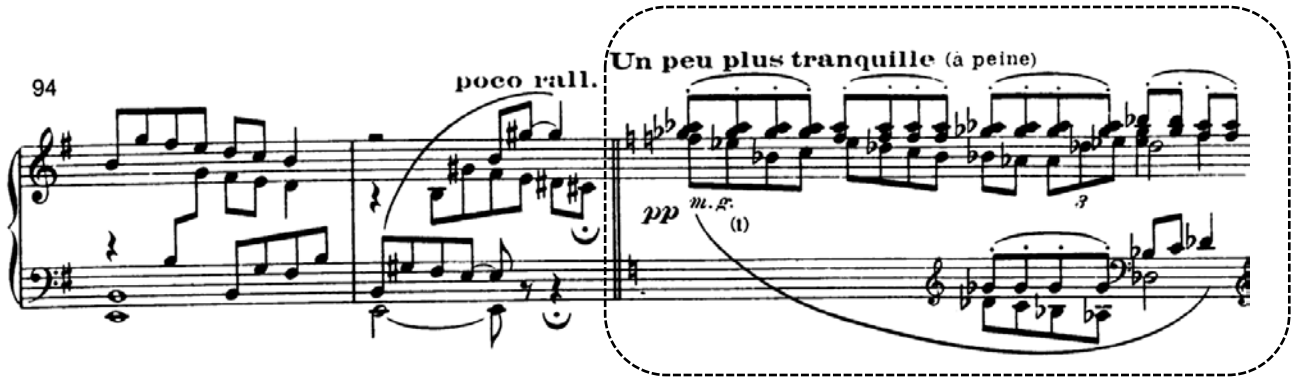
・《4 つの新しいソナチネ》*Quatre Nouvelle sonatines*

ケクランのピアノ曲の代表作の一つ。「ソナチネ」シリーズの白眉。

第 3 番は 3 楽章制(他の 3 曲は 4 楽章)。ダルクローズ［後述］に献呈。

第 1 楽章: スケルツァンド・モルト・モデラート

第 2 テーマは、エルヴェ（d'Hervé 1825-92)のオペレッタ《ニトゥッシュ嬢》(1883)からの引用。

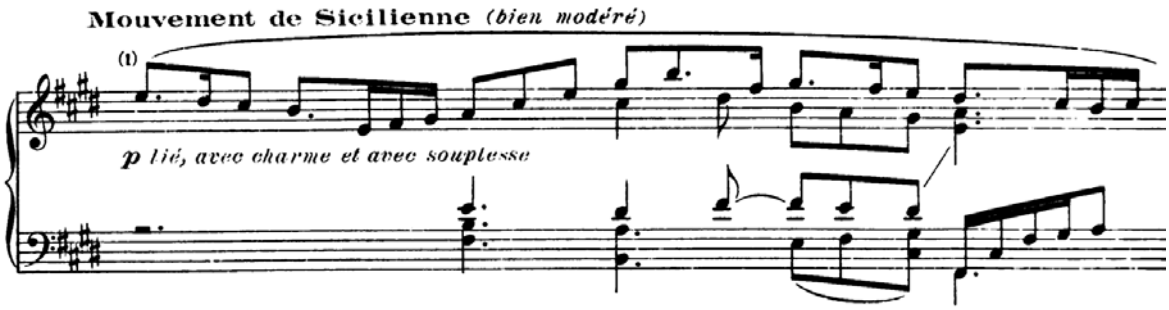


第 2 楽章: シチリア舞曲

6/8 拍子で書かれることが多いが、ケクランは拍子記号を書いていない。

このテーマはケクラン自身によるものだが、ダルクローズの講演会のひとつで使われた。

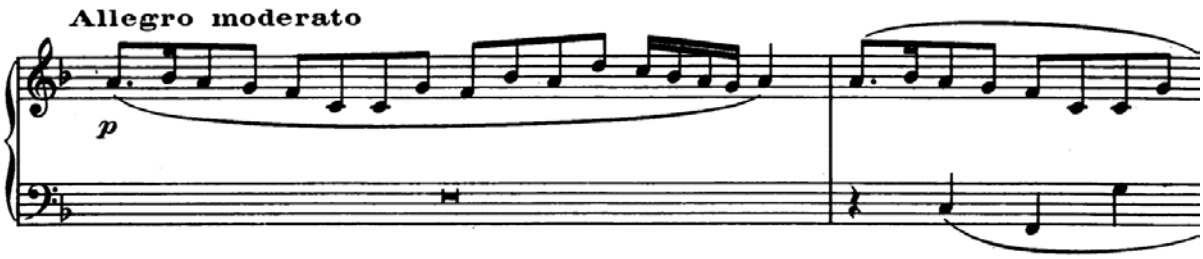
テーマ自体は素朴で平易だが、対位法も和声も手が込んでいて、演奏は難しい。



第 3 楽章: アレグロ・モデラート

わらべうたのような、素朴なテーマ。

第 2 楽章ほどではないが、これも手が込んでいて、音楽的にはなかなか高度。



4. ダルクローズとケクラン

・ジャック=ダルクローズ（Emil Jacques-Dalcroze 1865-1950）
　スイスの音楽教育者・作曲家。
　「リトミック」Rythmique の創始者として名高い。
　　Cf 黒柳徹子『窓際のトットちゃん』

・スナール室内楽シリーズには以下の作品が収められている。

《心は歌う》*Le coeur qui chante*　歌曲　1924 年
《愛は踊る》*L'amour qui danse*　歌曲　1924 年
《エコー・オブ・ダンシング》　*Echos du Dansing*
　ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための曲　1924 年

「(トットちゃんが通っていた)トモエ学園は、ふつうの小学校と授業方法が変わっているほかに、音楽の時間が、とても多かった。音楽の勉強にも、いろいろあったけど、中でも「リトミック」の時間は、毎日あった。リトミックというのは、ダルクローズという人が考えた、特別のリズム教育で、この研究が発表されると、1905 年(明治 38 年頃のことなんだけど、全ヨーロッパ、アメリカなどが、いち早く注目して、各国に、その養成所とか、研究所が、できたくらいだった。」（黒柳徹子『窓際のトットちゃん』p.107）

・ケクランとダルクローズの接点
　音楽教育への関心、大衆的な音楽への関心。
　ケクランは『ル・メネストル』*Le Ménestrel* 誌（1925 年 3 月 20 日）に
　「ジャック=ダルクローズのリトミックにおける音楽性」を執筆。

おわりに

ケクランの墓（南フランスのヴァール県、レイヨル・カナデル・シュル・ラ・メール）。墓碑銘には次のように書いてある。

L'esprit de mon œuvre et celui de toute ma vie est surtout un esprit de liberté.

（私の作品の精神、そして私の生涯を貫く精神は、なかんずく自由の精神である。）

https://fr.wikipedia.org/wiki/Charles_Koechlin

主要参考文献
近藤秀樹「スナール社の挑戦」『南葵音楽文庫紀要』第 1 号、和歌山県立図書館、2018 年。
Robert Orledge: *Charles Koechlin* (1867-1950) *His Life and Works*, Harwood Academic Publishers,1989.
Charles Koechlin Correspondences, La Revue Musicale, 1982.